

第4節 移住

4.1 移住者の数

鹿児島県当局は、桜島住民の移住希望者の数を当初元戸数の60%として計2,000戸、これに大隅地方の500戸を加えて総計2,500戸と見込みました。さっそく県知事は上京して、官有地の無償譲与、被害地復旧費の貸与、罹災民移住費の補助、罹災地教育費の貸与等を政府に陳情した結果、全面的な理解が得られて移住が実現する運びになったのです。桜島以外でも牛根村や百引村など、降灰により甚大な被害を被った地域からの移住希望者も多く、移住先は国有地原野を中心に計画されました。

移住条件を提示して、移住先は希望者各自で決めることになり、県が指定した熊毛郡・肝属郡、宮崎県、朝鮮などの「指定移住地」と、移住希望者が任意に決める「任意移住地」に区別されました。大正4(1915)年の集計では指定移住地へ計6,245人(1,002戸)が移住し、任意移住を含めると3,000余戸の約2万人が移住しました(表2-4-1)。

被害の大きかった垂水・百引・牛根村等では、新城・花岡・志布志・大崎・高隈・福山方面の親戚や知己を頼って任意移住した家族も多く、移住者は県の小屋掛け費40円の補助で家建て、当面の生活費の支給で開墾に精を出したものの、異郷での

移住条件（鹿児島県）要約

桜島爆発による被災者であつて現住所に居住出来ないものは左の計画により移住させる

移住させるものは左記各号の一に該当し意思強固にして復帰の念なく生計困難全戸移住するものに限る

一 災害により土地家屋を滅失したもの

二 災害により家屋を失い容易に土地復旧の見込みがないもの

三 災害に因り土地の生産力を失つたもの

四 前各号の一に準ずる災害を受けたものは同一戸籍内にあつても独立の生計を営み戸数割を負担するものは特に一戸とみなす

図2-4-1 移住条件

表2-4-1 指定移住地への移住者内訳（大正4(1915)年6月現在） 鹿児島県 1915 資料 単位：人

出身地	熊毛郡			肝属郡					宮崎		朝鮮	計
	中割	国上	現和	北野	名辺迫	内之牧	大中尾	大野原	夷守	昌明寺		
東桜島	199	216	23	541	463	407	1,429		47			3,325
西桜島	1,131	237	266			168		134	229	73	54	2,292
その他		114					110	352	52			628
小計	1,330	567	289	541	463	575	1,539	486	328	73	54	6,245
総計	2,186			3,604					401		54	6,245

(その他：百引・垂水・牛根・市成・西志布志など)

生活に疲れ果て1、2年で帰郷した家族もあったといいます。

4.2 土地配分等の条件

指定移住地の土地測量等や移住民への土地配分は、詳細な“鹿児島県条例”に基づいて県当局が直接行いました。土地は“20年無償償還”と決められました。また移住者には家族数や開墾反別に応じて、罹災救助基金から移住費・農機具費・種苗費・家具費・小屋掛け費などが与えられ、食糧費は最初の1年間は年齢や土地の状況により1日1人平均6～8銭を現金又は現品に換えて支給するとされました。

4.3 移住の開始

(1) 種子島

a 中割地区（十六番）

移住の先陣を切った種子島への第一陣は、早くも大正3(1914)年3月12日、溶岩に埋没した西桜島村横山・赤生原集落の30戸(181人)が鹿児島港を出港し、洋上はるか西之表南部の標高200mの高台に位置する中割（十六番）に向かい、最終的には合計206戸(1,330人)になりました。



図 2-4-2 中割移住記念碑（県道脇）

今でこそ集落内に新種子島空港が開港し、尾根伝いに走る県道も国道並みに整備されていますが、当時の雑草と灌木に覆われた密林の開墾は辛苦の極みであったとの記録があります。近くの丘に月読神社（桜島に現存する神社と同名）を建て、ことある度に集まり故郷を偲んだといわれます。

移住関係者の子孫は現在では6家族10余人の少数派になり、移住とともに開校した鴻峰小学校も休校になっています。また近隣には平松と二本松の2集落にも移住記念碑がひっそりと残っています。

b 桜園地域（種子島北部）

国上（桜園）への移住も大正3(1914)年4月に始まりました。桜園は西之表港から北へ約12km、さらに東へ2km入った標高200mの丘陵地にあります。

種子島北部への移住者は一時2,193人に



図 2-4-3 桜園神社境内にある記念碑

ふく
膨れ上がりましたが、桜園地域に入植した 567 人は神社を建て、その土地を桜園と名づけて故郷を偲びました。桜園神社に建立された集落創立 70 周年記念碑には“運命は自分が拓く 人生行路は汗と感謝で…”と銘記されております。近くの柳原・^{げん}現和（屋久川）・安納・桃園・竹鶴地区などにも桜島関係集落が点在しています。

(2) 肝属郡区

a 佐多大中尾地域

4 月から 6 月にかけて東桜島村黒神・瀬戸集落と、百引村から入植した指定移住地で最大規模を誇る地域です。自然条件が極めて厳しいながら最大 200 余戸 1,500 余人で構成されていた集落も、現在では 50 戸足らずの小集落になり、移住に伴い建立さ



図 2-4-4 大中尾移住記念碑（公民館内）

れた大中尾小学校は、児童数減によって平成 25(2013)年 3 月で閉校になりました。中学校もすでに佐多中学校に統合されています。

集落は地形的に西向きの高所に位置するために冬場の西風が厳しくて、原生林伐採のときには防風林として相当な数の椎の木が残されたといわれ、その名残が集落内の河川沿いに現存しています。公民館敷地内に移住記念碑が建っていますが、碑文は途中で終わり、完成していません。どのような言葉を刻みたかったのでしょうか。

大中尾移住記念碑
時惟大正三年一月十二日
大噴火ニヨリ吾等ノ祖先以
来墳墓ノ地タリシ東桜島村
瀬戸部外四ヶ字ハ忽溶岩
ト化シテ其影ヲ留メズ家ヲ
失イ衣食ヲ奪ワレシ多クノ
罹災：

図 2-4-5 碑文

b 田代村内之牧・久木野地区

内之牧・中尾・久木野（移住 92 家族）は田代村の東端の山間で、雄川の源流付近に位置しています。内之牧集落（52 戸）と中尾集落（31 戸）に移住した人々は当初垂水村新城に避難していた西桜島赤水と東桜島脇・瀬戸の避難者が主で、4 月 15 日に全員が新城海岸を出発し移住地に向かったとされます。田代入植の理由は“田んぼが開けそうだ。茶やキノコ栽培ができそうだ”であったと伝わっています。

久木野集落（18 家族）は、西桜島村の藤野・武・西道・松浦・二俣集落で、火砕流のよる熱風で家は焼かれ、畑は厚い火山灰に覆われた人々が、5 月 13 日に雄川沿いに約 20 km の道程を 1 日がかかりで移住地までたどり着いたといわれています。岩盤地帯の原生林と原野と竹藪の開墾は日々休みなく続けられましたが、^{くわ}鋤だけに頼る

開墾は困難の極みであったそうです。合間を見ての炭焼き手伝いで現金収入があり、移住の年にはサツマイモの苗を近辺の農家から仕入れて植え付けることができました。

c 大根占桜原地区〈名辺迫〉

大根占北端の横尾岳（標高 426 m）の中腹標高 400 m の丘陵地に位置する山野に入植したのは溶岩に埋もれた黒神集落からの計 463 人で、地名を「桜原」と名付けました。この地は飲料水の確保に大変な苦勞を強いられながらも住民の結束は固く、黒神にある腹五社神社の分社として麦ワラ小屋の桜原神社を建立しました。



図 2-4-6 集落を見守る桜原神社

碑文には“…大正三年桜島の大爆発に依って、この土地へ避難である先人たちは家を焼かれ、全財産を埋没されて命からがらはい上がって来たのであります…”と記されています。桜島大根の栽培が盛んで、公民館には記念碑が残っています。

d 花岡村花里地区

花里地区も高須川上流、高隈山の南西斜面（標高 350 m）に位置する山林と茅の密生する丘陵地で、耕地はその北方約 2 km 上流の新城村（垂水市）の北野国有地でした。当地へは 5 月から計 3 回にわたり、東桜島村有村や脇などから 541 人が移住しました。

花里入植の理由は“鹿児島が近い、海が近い、鹿屋が近い、魚の取れる古江港が近い”等で、“花里”の地名は当時の県知事に賜ったもので、“名を汚すこと無きよう”を合言葉に団結した集落であったと評判でした。

e 垂水大野原地区

大野原は高隈山系の中腹で、垂水高峠の南側山頂部の標高 540 m にある数百町歩の茅草原でした。平均気温 15 度で低地よりも 3 度前後低く、霧の多い地区です。

移住は大正 4(1915)年 4 月、垂水村から 61 戸と西桜島白浜集落から 20 戸など合計 486 人で始まりました。少しでも桜島に近いことが理由で人気が高かったそうです。7 月までは食糧費のほかに小屋掛け費・家具農器具費・油類代・種苗肥料などが与えられたので、桜島にある土地の災害復旧の見通しがつくまで入植するという期限付き

移住の例もあったようです。入植から 20 年、名実ともに自分の土地になる喜びは大きく、公民館敷地内に「土地移転記念碑」を建立して盛大にお祝いしました。今では他の地域と同様に過疎化に悩みながらも、穏やかな集落になっています。

(3) 宮崎県霧島山系

a 西諸県郡小林大王

霧島山系の韓国岳の近くにある夷守岳（標高 1,344 m）の麓にある大王集落も桜島からの移住者が拓いた土地です。大正 3(1914)年 5 月 6 日を第 1 陣として、3 回にわたって東桜島、西桜島、百引村から延べ 328 人が移住しました。一家総出で森林原野や竹林を開墾して 7 年がかりで 107 町歩（106 ha）の畑地に変え、やがて 21 町歩（21 ha）の水田も完成させましたが、田植えが行われたのは昭和 4(1929)年になってからでした。

b 西諸県郡真幸村昌明寺

矢岳の南斜面、標高 400 m の所にある昌明寺高山集落には、西桜島から 73 人が移住しました。開墾、開田・ため池・用水路の整備と、家族全員が一生懸命に働いてきましたが、現在、桜島移住者の子孫は一人も残っていません。

(4) 朝鮮全羅北海方面

当時日本の植民地であった朝鮮には、西桜島の 54 人（11 家族）が移住しました。県は特例として、旅費交通費と 1 年分の生活費などを支援しました。これら家族のその後の消息はわかっていません。

もはや危険はない 大森博士の談

鹿児島新聞記者編：桜島大爆震記 大正 3(1914)年 4 月 13 日 p98

… 桜島噴火の様子は次第に減少しているし、鳴動があっても、また灰が降っても、もはや大きな危険はないから、桜島の避難者は、湯之・野尻・高免・白浜・二俣・松浦・西道・藤野・武のような場所（集落）は帰ってよろしい。

コラム ぐちえらぶ 口永良部島

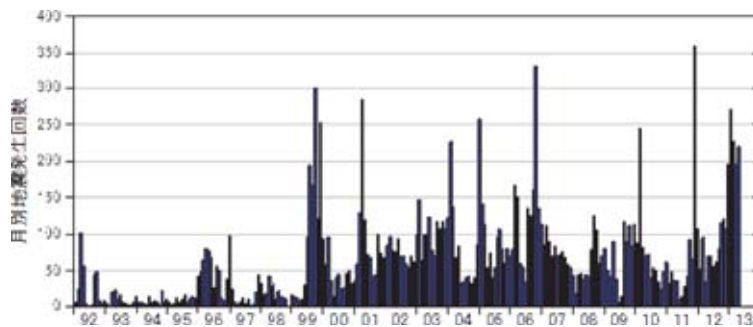
口永良部島は、屋久島の西方14 kmにある火山島です。^{ひょうたん}瓢箪の形をしており、その西側には番屋峰を中心とする古い火山体が、また東側には野池・新岳・古岳などからなる新しい火山体が存在しています。口永良部島の山麓には西の湯・^{ねまち}寝待・^{ゆむぎ}湯向などの温泉があり、火山体には熱水が広く分布していることが推測されます。向江浜から南に連なる新しい溶岩地形は、約1,000年前に新岳から流出した溶岩の地形です。

記録に残る1841年以降の噴火はすべて新岳の山頂火口あるいはその東の割れ目火口から発生しています。年代は特定できていませんが、約200年前に古岳でもマグマ噴火が発生したことが明らかになっています。名前は「古岳」ですが、その火口内では噴気活動が活発であり、まだまだ噴火する可能性を秘めた火山といえるでしょう。昭和8(1933)年12月の噴火では、新岳の南東2 kmにある七釜集落が噴石により全滅し、死傷者は34人にも上りました。昭和41(1966)年11月の噴火では、新岳の北3 kmにある寝待まで噴石が落下しました。最後の噴火は昭和55(1980)年9月に新岳の東側に生じた割れ目から発生した水蒸気爆発です。

昭和55(1980)年以降、30年以上噴火はありませんが、平成11(1999)年からは時折、火山性地震が群発すると同時に、新岳火口周辺の地盤が膨張するなど、次の噴火に向けての前兆現象と考えられる異常現象が繰り返されています。平成20(2008)年10月から始まった新岳火口内の南壁からの白色噴煙活動は現在も続いています。



口永良部島の新岳火口



口永良部島の火山性地震の月別発生回数

第5節 復興

5.1 島民への帰還命令

噴火から1か月後の2月14日には、危険状態を脱した島民に帰還通達が発令され徐々に桜島への帰還が始まりましたが、噴火前の元人口に対し、帰還できたのは43%にあたる9,188人でした。

表 2-5-1 桜島住民の帰還数

	元戸数（人口）	帰還戸数（人口）
東桜島村	1,114 戸（8,331 人）	596 戸（2,892 人）
西桜島村	2,002 戸（13,037 人）	1,017 戸（6,296 人）
計	3,116 戸（21,367 人）	2,613 戸（9,188 人）

早急に帰還せよ

福石 忍（南日本新聞連載“桜島炎上”106回：昭和51(1976)年3月10日）

…帰島者は17日頃から急速に増え始めました。川上村長が避難先の各市町村役場を通じて出した「早急に帰還せよ。応じなければ救助を打ち切る」という厳しい通達がようやく効を奏したのです。しかし、帰ってはきたものの、黒い噴煙は依然として上がり続け、恐ろしい鳴動も響いています。山野はすべて灰に覆われ、まさに“うす汚れた銀世界”とでも形容するしかありません。かつての緑豊かな島の面影はなく「これがおれたちの故郷か」と、人々は腹わたの力が抜けていく思いでした。…村役場は、厳しい帰還命令を出した手前、救助に乗り出す必要があり、2月17日から28日までの間、15歳から70歳までの男子に白米3合、その他の者には白米2合の割で支給しました。

5.2 復興の状況

(1) 桜島

東桜島地域では有村集落にあった村役場は溶岩に埋まったために、2月には降灰に埋没していた黒神宮原校の裁縫室^{さいほう}を掘り出し、湯之集落（現東桜島町）に移設して村役場に充当し、本格的な村役場の事務が開始されました。昭和11(1936)年に至り溶岩道路（袴腰^{はかまごし}～東桜島）が完成しましたが、中間地点にあたる調練場付近（赤水～野尻間）は土石流発生のためにしばしば修復を要しました。それまでの集落間は住民が手作業で作った里道だけでしたので、砂利道とはいえ馬車の通れる道路が完成したことで集落間の交流が盛んになり、さらに果樹（ミカン・ビワ・柿・桃・梅）等の生産力がつくに従い、徐々に生活に余裕が出てきました。

噴火の大正3年度は教育費の過半を郡費からの補助、残りを県の無利息貸付金に頼

り、村役場費は国税調整費として636円余が国庫補助され、古里川原・野尻川原砂防工事には県から2,593円の補助を受けました。また、^{てんちがえ}天地反し等の耕地復旧工事費として20,925円の国庫補助を受け、さらに肥料資金に8,850円の交付を得た効果で、耕地の復旧は急速に進み、早くも暮れにはサツマイモの収穫がありました。

一方、西桜島でも噴火後の大正11(1922)年の人口(帰還者)は6,833人となり、次第に落ち着きを取り戻していきました。桜峰小爆発記念碑文には、村の耕地整理組合が政府から無利息金148,200円を借り入れて土地730町歩(724ha)を復旧し、さらに県庁より肥料購入資金13,365円の補助を受け、また義援金等の中から81,788円の寄贈を得て、村民にようやく^{あんど}安堵の日が来たと刻まれています。

昭和7(1932)年には村道(袴腰～白浜)が計画され昭和14(1939)年に完成し、昭和16(1941)年には第一桜島丸の建造とともに袴腰海岸の埋め立て工事に着手し、昭和18(1943)年からは海上航送が始まりました。住民同士の情報交流はもちろん果実をはじめ野菜などの鹿児島市内への輸送が飛躍的に増大して、住民生活を大いに潤すことになりました。東桜島と同様に溶岩流に埋没した村役場は一時鹿児島郡役場に仮置きし、3月からは同村西道集落内の個人宅を転々としたあと、大正5(1916)年に村舎を藤野集落内に新築して8月から村役場の業務を開始しました。

(2) 垂水・牛根

桜島からの避難者の救済に尽した功績は大いに称賛されたものの、降灰による農作物の被害は桜島と同様に壊滅的で、土石流による河川の氾濫による農地・道路・橋梁等の被害も甚大で、田畑復旧工事費43,000円(政府の貸付金)・河川工事費71,260円(県の補助金)・村負担金18,779円が投入されたことによって、農地の回復、道路の整備、河川堤防の修復、それに伴う現金収入など、住民は災いを福となして、噴火前のような安穏なる生活を取り戻していきました。

(3) 輝北・百引

牛根村と同様、桜島噴出物によって9割の農地と林地が被害を受け、金額にして農地被害737,100円、林産被害145,880円と算定されました。当地は畜産も盛んでしたが、馬の餌が枯れてしまったことも深刻で、果樹(ミカン・柿・桃・梅)被害、養蚕被害など^{さんたん}惨憺たる状況に陥りました。被害地では早急に耕地整理組合を設立して県令による復旧工事に立ち上がり、^{せアール}天地反し料1.5円～2.0円/畝(a)の請負もありました。人手不足で畑の整備が進まないながらも、整備後の畑ではサツマイモ・大根・小麦などは噴火前に匹敵する収穫がありました。

5.3 生活支援策

被災した住民は家屋や耕地の修復に忙殺されるかわら、当面の生活維持のために復旧砂防工事等の賃金が得られ、炭焼きや薪売りの日々が続きました。西桜島では多くの島民が鹿児島市内に出稼ぎに出たということです。県知事は農作物の被害調査と応急処置について、農商務省に指導を仰ぎ、麦・野菜・豆類・果樹類・煙草苗・砂糖キビ等について、きめ細かな指導がなされました。肝心の耕地は降灰のため耕作できないことから、当面の生活支援策として、1家族58歳までの1人あたりに金50円（58歳以上+4円/人）を支給し、さらに復旧が完了するまでの条件で15歳以上70歳の男子へは1日あたり白米3合、その他の同居人には白米2合が支給されました。

ほかにも降灰除去作業・天地反し作業・石灰散布など耕地回復対策に手厚い補助金や奨励金制度があり、耕地整理組合も設立されるなど耕地整備が進み、1年後には農作物の生産が始まりました。なお、ミカンやビワなど柑橘類は全滅の状態であったため、回復に相当な年月を要しました。桜島以外にも噴火で打撃を受けた肝属郡の牛根・百引・市成・恒吉・野方・垂水・新城など広範囲に、これに類した生活支援が行われ、被災民に多大なる希望と意欲を与えました。

5.4 学校の再開

東桜島では溶岩の下敷きになった瀬戸校（児童数313人）・有村川原校（同280人）の2校はやむなく廃校にされましたが、難を免れた改進黨校（古里:119人）・芝立校（湯之:208人）・中央校（野尻:151人）の3校は2月24日には再開されました。宮原校（黒神:214人）は降灰により校舎が埋没し、一時廃校になりました。宮原校分校（高免:44人）は降灰の除去作業に手間取ったものの、5月には授業を再開できたので本校（黒神）の児童を受け入れました。一方、西桜島では最も大きな桜洲校（小池:1,040人）が被災したために、大正4(1915)年の復興まで児童は分散授業となりましたが、桜峰校（西道:810人）と分校（新島:35人）は無事でした。

噴出物による被害をまともに受けた牛根村では松ヶ崎校（児童数277人）が倒壊し、後日の土石流被害に見舞われた牛根校（同407人）は休校となり、児童は復旧まで境校に収容されました。

廃校はもちろん、難を免れた学校でも児童数が半減したために、教員数に余剰が生じて多くが転出せざるをえませんでした。一方、避難先や移住地では“分教場”を増設して対応しましたが、移住者の多い大野原・大中尾・中割の3移住地では尋常小学校が新設されました。

5.5 生活用水道

島内では海岸付近にある釣瓶井戸^{つるべ}を回復させるとともに天水（雨水）も活用されましたが、特に生活用水確保が困難であった東桜島地域で上水道が整備されたのは昭和25(1950)年以降のことで、垂水早崎の湧水を大正・昭和の溶岩原を通すという非常に困難な工事を克服しての成果でした。西桜島地域では、扇状地が広がっているために生活用水の確保にはさほど困難はありませんでした。

肝属地方でも河川水・湧水等の水源の復旧がなされ、生活用水困難の情報は少ないです。ただ、移住地ではいずれも地理的に高台にあったために、婦女子は遠く離れた沢水場までの水くみ作業に非常な苦難を強いられました。移住地中割（種子島）では10数人の患者（腸チフス・赤痢）が発生するに及び、鹿児島県は熊毛郡長に急ぎ井戸を掘ることを命令し、簡易水道が整うに従い生活条件が好転していきました。

130年後の社会

南日本新聞社編：鹿児島百年（下）第五章霊峯消えず p98

鹿児島新聞の大正爆発一周期記念号に“130年後の社会”と題する空想記事が掲載された。

…まず、最も物議をかもした“測候所”は、そのころになると国中に博士が増え、所長ももちろん博士、所員には学士もいることであろう。桜島があるので鹿児島にも理科大学ぐらいできているかも知れない。次に無線電話局ができて電信不通の心配はなかろう。新聞は印刷がすたれ、各戸に無線電話機が設置されていよう。記者は爆発を予知していて、時間になれば飛行機で取材するかも知れない。写真も進歩し夜でも写せるようになっていて、海外からの通信員はかの壮絶なありさまを活動写真におさめるかも知れない。市内の金持ちは飛行機で避難するであろう。…爆発のさいのガスは利用法が発見され、誘導蓄電して電気とします。それを電気溶岩と称して公売すれば、県の歳入がふえ県下の景気はとみに加わるであろう。…

第6節 見聞記抄録

6.1 瀬戸集落の状況

黒岩源三、大山睦助談（野添武志編書“桜島爆発の日”昭和55(1980)年 p129）
…私どもが瀬戸の海岸に来てみますとその入江には、大小数百隻の船が荷物と人を積み込んで沖に仮泊していました。…海岸で二人の青年が焚火にあたりながら警戒をしていましたが、この二人の話によると地震が強くて島が燃え出る恐れがあるので、瀬戸集落では11日の夕方までに老人や女子供はすべて垂水方面に避難を終了し、残留している若い者も“いつ噴火してもすぐ逃げ出せるようにと、このように沖待ちの船の上で仮眠しているのだ”とのことでした。そして緊急時の合図は、お寺の鐘がなることになっているとのことでした。

このような瀬戸集落の異様な雰囲気を見た私どもは桜島の噴火が間近かに迫っていると感じると同時に、瀬戸衆に比べ、黒神衆はのんびりしていることを痛感しました。私が瀬戸の青年と話しているときも地震は間断なく続き、山はゴーゴーと地響きを続けていました。まもなく私どもは、渡し船で対岸の戸柱に着き、歩いて中俣の知人宅につきました。12日の午前3時頃でした。

6.2 湯之浜の命拾い

木之下金次、迫田鉄之助談（野添武志編書“桜島爆発の日”昭和55(1980)年 p21）
…沖小島を目指して泳いだが途中で引き返してきた人に、湯之の新五郎（32才）と妹の末松（25才）の二人がおりました。末松は12日の爆発に気も動転して湯之浜にかけ下って来ましたが、付近には板ギレ一枚すら残っていませんでした。

元気な若者は沖小島をめざして次々に泳いで行き、噴火の勢いはますます激しくなるなか悲嘆にくれる末松の前に、長男の新五郎はハンギリ（大きな木製タライ）を担ぎ、次男の新次郎（29才）はミチ板を抱えて走ってきました。末松は、沖小島に泳いで渡ろうとしている二人の意図を察し、兄の新五郎に頼みました。「兄さん、私も連れて行って!」。しかし兄は首を横に振って「お前は無理じゃ」と言いました。末松は小柄な女であったが、人並み外れて器量もよく根性のある働き者でした。しかし既に妊娠8か月の身重の体であったのです。それでも末松は泣きすがって連れて行ってくれるように頼みました。二人が押し問答をしている間に、次男の新次郎は板にすがって沖へ泳いで行きました。新五郎と末松の二人もハンギリにすがって沖小島へ向かい泳ぎ始めました。半時間も泳いだ頃、身重の末松は寒さのため手足の感覚を失いかけてきました。その唇は早くも土色に変わっていて、「兄さん、私はもう駄目! 兄さ

んは一人で泳いで行って!」。そんな妹に新五郎は「がんばれ!もう少しだ」と励ましたが、まだ半分にも達していません。…末松は泳ぎながら桜島を見ると、猛烈な噴煙の合間に、海岸近くの生まれ育った我が家がかすかに見えていました。「兄さん、どうせ死ぬなら、せめて陸で死にたい。」とつぶやく末松の言葉に新五郎は強く心を動かされました。

二人はやっとのことで引き返すことができましたが、仮死状態の末松を海岸に残っていた人たちが近くの民家に運び込み手当をしてくれたので、ほどなく生きかえることができました。その日の午後3時すぎ、二人は湯之浜に取り残され岩陰^{いわかげ}で悲嘆に暮れていた人々と一緒に汽船に救出されました。

6.3 大隅海潟付近の哀れ

宮原景豊私家本；島火記事（昭和21(1946)年 整理製本）要約

…荒崎付近は、あたかも蟻の行列のように、衣服調度品を風呂敷や寝ゴザに包んで手に下げたり背負ったり、また病人は戸板で担がれたり背中に負われたり、泣き叫びながら逃げ惑う人々で埋まっておりました。なかにはせっかく持ち出した書籍ノート衣類調度品や背負子^{か れ こ}（運搬道具）さえも放り出して道路に散乱するありさまでした。…荒崎の沖から江の島付近では溢れんばかりの人を乗せた救助漁船が数えきれないほど続いておりました。

6.4 牛根村での悲惨

桜島爆震記（永正弧峯：手書私家本）大正4(1915)年10月 p9 要約

…はるかに桜島を展望したら、鍋山の南端数か所の噴火口から黒煙がもくもくと噴きだし、牛根一帯をかすめて遠く高隅山の上にかかり、雷鳴がとどろき縦横に閃光が走り、その恐ろしさに鳥肌が立ちました。風光明媚^{めいび}で人情風俗の豊かな桜島も今や恐怖の形相に変わっていました。一方、牛根海岸一帯は青々であるべき海面が軽石のために黄褐色に変化し、木々はみな枯れ木のようになり、人家は埋まり、倒れ、焼けて、その惨状被害は百引村よりひどいものでした。

牛根麓の岡には桜島の避難民か、牛根の避難民か、背中に荷物を背負い、山手の方へ逃げていくのが見えました。しばらくして50才くらいの婦人4、5人が手荷物を持ち、子供を連れて急勾配の山道をかき分け登って来ました。髪は乱れ、青ざめた顔は哀れに見えました。我らの所に来て拝み、「何とぞ助けてください」と涙を流して頼むのでよく聞いたら、昨日に桜島黒神の家を出て船に救われてここに着いたもので、昨日から何も食べておらず、疲れて歩くことができないという。皆は同情して携帯し

ていた昼食を与えることでありました。この日も終日降灰は止みませんでした。

6.5 二川集落での古老の話

今村茂彦著；記念誌嶽野百年の歩み 昭和 59(1984)年 p10 要約

…1月12日は朝早くから不気味な地震が始まり、午前10時になると大音響とともに黒雲が広がり、見る見るうちに夜の世界同様に真っ暗になり降石が始まりました。そのときは、世の中もこれで終わりだと家族が仏壇のところに寄り、線香をたき手を合わせて覚悟を決めました。降砂が70cm近く積もり、その後も降灰が4、5日も続いて、田畑をはじめいろいろなものを埋め尽くしました。

その後、荷物をまとめて逃げ出す人もいましたが、たいていの人にはまた舞い戻ってきました。それから何日かたって最も恐ろしかったのは、降灰の後の雨の日に、積もった灰が津波のように押し寄せて流れることでした。この様子を見た時は、まさに生き地獄のように思われました。

6.6 肝属郡長の県知事への報告

肝属郡被害始末記（大正3(1914)年1月14日）

…瀬戸付近に行き目撃したものは、東桜島村脇から黒神にわたる約4km位が鳴動し、噴火の状況は筆舌つくしがたい壮絶な光景でありました。垂水村は現在のところ特別な被害はないが、各戸は何れも避難中であります。牛根村は数尺（1尺=30cm）の降石によって耕地が埋没する惨状を呈しており、将来復旧できるか憂慮^{ゆうりょ}されるところであります。村民は今避難中であるため、追って精査を行います。また百引村高隈村でも同様な被害があります。

一方、東桜島村瀬戸黒神の人たちは先を争って家を出て避難したため、妻子兄弟が離散してお互いを探しだす暇もないために、正確ではありませんが、垂水・新城・花岡・高隈・鹿屋の1町4村で現在収容救護しつつある者は約4、5千人の多数に達しております。なお、各村長に向けて救護上の注意を与えました。また海上において東桜島収入役1人死亡、垂水村に仮埋葬しました。また牛根村において松ヶ崎小学校倒壊により馬小屋1棟が消失しました。以上取りあえず御報告いたします。

コラム 諏訪之瀬島

諏訪之瀬島は桜島と同様に噴火活動が長期にわたり続いている火山です。洋上から夜間にみると常に山頂が明るく見えることから「東洋のストロンボリ（灯台）」とも呼ばれています。

19世紀には溶岩流出を伴う規模の大きな噴火が2回発生しました。200年前の大噴火（文化噴火：1813年）では、多量のスコリア（火山噴出物の一種で、塊状で多孔質のもののうち暗色のもの。）の噴出、火砕流の発生、溶岩の流出がありました。噴火の後半には山頂の崩壊壁の一部が崩れ、カルデラ地形が拡大しました。この噴火で全島民が悪石島などに避難し、70年間も無人島となりました。その後有志が移住し開拓を始めましたが、その直後の明治17(1884)年に噴火活動が活発化し明治溶岩が流出しました。激しい降灰のため、開墾は困難を極めたとのことでした。

20世紀の噴火活動は1950年代から活発化し、御岳山頂のカルデラ（凹地）内の火砕丘（噴出物が積もってできた丘）で小噴火が頻発しました。諏訪之瀬島の噴火は桜島に比べて小規模であり、噴煙も高く上がることは珍しく、爆発に伴う空気振動も小さいものです。一連の噴火活動の間隔は2週間から1か月程度ですが、噴火活動がいったん始まると数分から数十分おきに爆発が頻繁に繰り返されます。

平成7(1995)年から数年はあまり爆発しなかったのですが、平成12(2000)年12月に火砕丘の外側斜面に新たな火孔を形成する噴火活動が始まり、その後現在まで頻繁に爆発を繰り返しています。



諏訪之瀬島



諏訪之瀬島御岳火口